

植物科名の統一

本 田 正 次

本稿は昭和30年8月29日、本会主催、郊外指導研究会の折、洲本市柳高校講堂において、講師東大教授本田正次博士の講演の大要である。

なお、本田博士の御講演のように科名が決定しましたので、附録で室井が今仮にイロハ順に並べてみました。表中()のある科名のうち、肉太字は新科名で、普通字は旧科名である。()のないものは従前通りのものである。

詳細は次の文献を参照していただきたい。

伊藤洋、高等植物分類表、北隆館(定価130円)昭和28年再版

(文責室井 綽)

教科書を扱う時にも参考書を読む場合でも、また教育に、研究に、植物の科名が学者により書物により非常にまちまちであるから取扱いの上に甚だ不便であるという声を聞くのはずいぶん久しい前からのことであつた。そして純研究者は別として実際の教育指導に当つておられる小中高校の先生方から何とかして統一のある標準の科名を制定してほしいという要望も私の耳に一再でなかつた。私自身もあらゆる見地からこのことを痛感していたので、植物科名の統一の問題についての私見をある学術雑誌に発表したところ、かねて畏敬おく能わざる碩学牧野富太郎博士から痛烈な叱責を頂戴したことは私の最も意外とし、また最も遺憾とするところであつた。私の述べた趣意はそれまでイネ本科とかシソ科とかのように植物の代表種名を冠した科名に全部を統一するのが学問を進める上にプラスだというのがあつたが、牧野博士はまつころから私の意見に反対されたのであつた。しかもその反対の理由としては一言半句も述べられなかつたので、私には今もつて同博士の真意が不可解のままである。

しかしそれはそれとして植物科名の統一のことや、標準科名の制定を必要とする私の考えは牧野博士の反対に会つてもいささかたりとも変わるところがない。それどころか私のこの考え方はその後ようやく専門学者特に分類学者の間にも関心が持たれるようになり、1948年以後全国の植物分類学者が数次の会合を重ねて意見の交換をなした結果、日本植物分類学会の名をもつて、昨年(昭和28年)の7月「植物科名に関する標準名表」なるものを植物学雑誌上で公表する段取りにまで立ち至つた。これはもちろんある特定の個人の意見ではなくて、日本の植物分類学者の総意と見てさしつかえないから、今後はこの標準名をだれに遠慮することも

なく、堂々としかも安心して教育に、研究に使用していただきたい。一昨年7月発表されたものは第1部として種子植物部門に限られたが、今後はまとも次第他の部分も発表される予定となつている。

標準科名の選定に当つてその基準とされた諸点は大体次のようである。すなわち①現生植物で日本産あるいは日本で栽培されているもの、②現在広く用いられているもの、③わかりやすい名であること、④他の科名と混同されるおそれの少ないもの、⑤語ろのよいものなど…がそれで、従つて必ずしも古い科名が採用されておらず、たとえ語源的には間違つておつても採用を重んじて採用されたものもある。また現行の科名が著しく不適當であると考えられた場合にはこの会で新定した名を与えたこともある。

今次の標準科名制定の目的は分類その物の標準を示したものではないから、一科を数個の科に分割するような意見にまでは干渉していない。たとえばバラ科を四つに分けて、シモツケ科、ナシ科、バラ科狭義の、サクラ科にしようと、あるいはもとのままのバラ科だけですまそうと、そのへんのことは全く随意になつており、あくまで名前だけの問題だけにとどまつている。

以上述べた結果の全部の一覧表は植物学雑誌第65巻の200ページ以下を見てもらえば一番よくわかることであるが、それを御覧になれない事情のある方の為に、一覧表の中から特に注意すべき科名だけをここに紹介しておきたいと思う。だからここで特別に取り上げないものは、たとえばユリ科・ラン科・クワ科・タデ科・マメ科・ブドウ科・ウリ科・キク科などのように従来呼称そのままが採用されているものと考えていただいて結構である。

裸子植物の中の科名では、別段に取り出して書くべき程のものもない。

被子植物の中の双子葉類ではいろいろと注意すべきものや変わった点があげられるが、まずドクダミやハンゲシヨウの属するハンゲシヨウ科はドクダミ科に統一された。これはドクダミがハンゲシヨウにくらべて普通である上に、名前も短くてすむからである。従来チャラン科ともいわれていたものはセンリヨウ科に決まつて、かえつて長くなつた嫌であるが、チャランは外国産である上にセンリヨウがよく知られていない為であろう。カバノキ科は私は前にはシラカンバ科という名を採用したことがあつた。そのわけはカバノキ

の名は通常シラカンバ、ダケカンバ、マカンバなどの総称であるので、特定の種名シラカンバを科名に用いたのであるが、今回カバノキ科に統一された。次に従来のヒツシグサ科は今回スイレン科となつたが、スイレンの方が短い上に世間によく通つた呼称だからである。また従来最も普通にウマノアシガタ科の名で呼ばれ、あるいはキツネノボタン科と称せられたものは今度の話し合いでギンボウゲ科になつた。これも字数が少ない上に昔からの通り名だからであろう。メギ科をヘビノボラズ科と書いてある書物もあるが、これは問題なく簡潔なメギ科にしくはない。アオツツラフジ科の名も長過ぎるのでツツラフジ科に統一された。今回アブラナ科に統一されたものは久しい間十字科または十字花科で通された名であり、またそれを日本読みで直したジフジバナ科などの名が消えたことは私のかねての主張が全面的に通つたことになつた。アメリカの食虫植物の仲間には私がかつて自分の本にヘイシソウ科と書いたことがあつたが、今回学名の読みそのままにサラセニア科となつた。これはヘイシソウなどとわけのわからぬ名を冠するよりも学名そのままの方がいくらかましかも知れぬ。日本にもある食虫植物の仲間では従来はイシモチソウ科と呼ばれていたものは、イシモチソウよりも一層代表的な種類であるモウセンゴケの名を科名につけて、今後はモウセンゴケ科と統一的に呼ぶことになつた。バラ科の名は従来も普通に用いられていたが、イバラ科と唱えられたこともあるので、短くて普遍性のあるバラ科に決まつたことはいうまでもない。従来長い間ヘンルウダ科の名で通り、またマツカゼソウ科などの名もできたが、今回の取り決めでは思い切つてミカン科と呼ぶことになつた。和名にヘンルウダの名はおよそナンセンスであり、マツカゼソウは日本自生の種類で結構ではあるが、ミカンの名の簡単明瞭で、しかも日本人の感覚にびつたり来る点で、和名としてこの名にまさるものはあるまい。これまでしばしばタカトウダイ科と呼ばれていたものはトウダイグサ科となつた。字数は同じであるが、代表種という意味であろう。小さい科でミズハコベ科ともアワゴケ科ともいわれていたものももちろん字数の少ない後者に決まつた。従来のツルウメモドキ科も同様の理由でニシキギ科がよいことになつた。アオカズラ科がアワブキ科になつた理由には字数が少ないという外にアワブキの方が地理的分布に普遍性があるからである。今回ツリフネソウ科と呼ぶことに決まつた科は従来はよくハウセンカ科と呼ばれたが、第一科の語ろが悪く、その上ツリフネソウが日本自生なのに対してハウセンカは外来の栽培種だからという理由で、かく改められた。南洋の樹種でキワタ科と称せられたものはパ

ンヤ科になつた。日本にも数種類をかぞえる蔓性種類の仲間ではしばしばサルナシ科の名で呼ばれたものはマタタビ科に統一された。

パンヤにしてもマタタビにしても用途に伴うその名の普遍性が買われたものである。

熱帯産の果樹パイアの属する科は私の本にチチュリノキ科と書いたこともあつたが、もちろん今回のパイア科が決定的である。私の本にマヤブシ科と書いてあるものには今回ハマザクロ科という全くの新和名が与えられた。フトモモ科にはこの外デンニンカ科という名もあつたが、ハウセンカ科が不採用になつたと同じ理由で、語ろの上からも字数の上からもフトモモ科が残されることになつた。セリ科が繖形科といわれたことはも早昔の語りぐさで、これを焼き直したカラカサバナ科も所属植物の種名を代表していないという厳然たる理由の下に廃止と決定。春の七草の随一に歌われ、食用植物として日本民衆と最も深い関係を有し、しかもわずか二字のセリが科名の代表として選ばれたのも道理である。

シヤクナグ科の名はよく人口に膾炙したが、今回は今まで多くの例で述べたとおりの理由でツツジ科の名が選ばれることになつた。チュウインガムの原料となるサボタ樹の属する科はアカテツ科かクロテツ科かだといふ委員の間で問題になつたが、ついに前者に決定した。モクセイ科をヒヒラギ科と書いた書物もあるが、これは慣用を重んじてモクセイ科の名が残された。フジウツギ科をマチン科という場合もあるが、この場合はたとえ字数は多くても日本自生の種類の名を冠した前者が合理的と考へべきである。同様の理由でガガイモ科が、トウワタ科かの選択に当つては当然前者が選ばれることになつた。長い間十字、繖形科などと同列に扱われて来た唇形科は牧野博士によつてせつかくクチビルバナ科と改称されたけれども、これでは植物種名を基調にしない改名だけに意味をなさないので、今回シソ科という簡単明瞭で、しかも企画にあつた科名に落着いたことは甚だ喜ばしい。

単子葉類の中でサジオモダカ科などという長い科名もあるが、今回はやはり従来広く用いられて来たオモダカ科の名が採用された。ドチカガミ科も従来の慣用になるトチカガミ科の方が選ばれた。十字科・繖形科・唇形科とともに禾本科の名も一般に普及してはいるが、植物種名で代表されていないので統一企画の上で落第。これに代つて一部で用いられているホモノ科も同じ理由で採用の限りでなく、日本の代表的栽培種であるイネを基にしたイネ科が確認されたことは繖形科のセリ科・唇形科のシソ科とともに誠に当を得た措置といふべきである。ヤシ科とシユロ科とでは前者の方

が採用と決つた。従来長く使われたテンナンシヨウ科は**サトイモ科**となつたが、この科名は牧野植物図鑑にも出ている。日本人には多く罐詰で知られているパイナップルの属する科はこれまでアナナス科と称せられていたが、今回日本植物分類学会の創意で**パイナップル科**という新和名が下された。これと全く同様な例は従来のダンドク科が**カンナ科**という新和名に変わったことである。アナナスよりもパイナップル、ダンドクよりもカンナの方がはるかに通りがよいからである。従来イ科といわれたリトウシンソウ科と呼ばれたりしていたものは、字数ではその中間の**イグサ科**に決定した。いかに何でもイ科ではあまりに呼称が短かすぎる

きらいがある。

以上で大略の説明を終つたが、これによつて教育上、研究上に確固たる拠点を得たことになるので、学問の進歩に寄与するところが大きい。

最後に蛇足ながら付け加えておきたいことは漢字で書いた科名、たとえば十字科・石竹科・毛茛科・薔薇科・大戟科・繖形科・唇形科・禾本科・莎草科などを用いないことである。たとえ名前の上では今回も採用に決定したマメ科・キク科・ラン科のごときも、**豆科**・**菊科**・**蘭科**などは書かないように注意したい。植物の名はこれを植物学的に取扱う時に限つてカナで書くのが原則となつているからである。

附 録

科 名 一 覧 表

アオイ	イワウメ	ガ マ	クルミ
アオカズラ (アワブキ)	イワタバコ	カヤツリグサ	ク ワ
アオギリ	イワヒバ	(スゲ、ハマスゲ)	ケ シ
アカザ	ウエルウイツチア	カラカサバナ (セリ)	ゲンサン(ゴマノハグサ)
アカテツ (クロテツ)	ウキクサ	カワゴケソウ	ゲンノシヨウコ
アカバナ	ウコギ	ガンコウラン	(フウロソウ)
アカネ	ウツボカズラ	カンナ (ダンドク)	コカノキ
アケビ	ウマノアシガタ	カンラン	コケシノブ
アナナス	(キンボウゲ)	キキヨウ	コシヨウ
(パイナップル)	ウマノスズクサ	キ ク	ゴ マ
アブラナ (ナタネ、	ウラジロ	キジノオシダ	ゴマノハグサ (ゲンサン)
ジユウジ)	ウラボシ	キツネノマゴ	サガリバナ
アマ	ウ リ	キフジ (キフシ)	サクラソウ
アヤメ (イチハツ)	ウリノキ	キフシ (キフジ)	ザクロ
アリノトウグサ	ウルシ (ハゼノキ)	キヨウチクトウ	ザクロソウ (ツルナ)
アワゴケ (ミズハコベ)	エゴノキ	ギヨリユウ	サザンカ (ツバキ)
アワブキ (アオカズラ)	オオバコ	キントラノオ	サトイモ
イ (イグサ)	オシロイバナ	キンボウゲ	(テンナンシヨウ)
イイギリ	オトギリソウ	(ウマノアシガタ)	サボテン
イグサ	オミナエシ (カノコソウ)	クサトベラ	サラセニヤ (ヘイシソウ)
(トウシンソウ・イ)	オモダカ	クス (クスノキ)	サルナシ (マタタビ)
イシモチソウ	カエデ	クスノキ (クス)	サンケイ (セリ)
(モウセンゴケ)	ガガイモ	クズウコン	サンシヨウモ
イソマツ (ハマサジ)	カキノキ	クチビルバナ (シソ)	シクンシ
イチイ	カクト (フナ)	グネツム	シソ (シンケイ、
イチハツ (アヤメ)	カタバミ	クマツヅラ	クチビルバナ)
イチヤクソウ	カツラ	グ ミ	シナノキ
イチヨウ	カニクサ	クリ (フナ)	シバナ (ホロムイソウ)
イヌカユ	カノコソウ(オミナエシ)	クロウメモドキ	シヤクナゲ (ツツジ)
イバラ (バラ)	カバノキ (シラカンバ)	クロタキカズラ	シユウカイドウ
イネ (カホン、ホモノ)	カホン (イネ)	クロテツ (アカテツ)	シユウシ (アブラナ)
イラクサ			

シユロ (ヤシ)
 シヨウガ (ミヨウガ)
 シラカンバ (カバノキ)
 シンケイ (シソ)
 シンチヨウゲ
 スイカズラ
 スイセン (ヒガンバナ)
 スイレン (ヒツジグサ)
 スギ
 スギナモ
 スゲ (カヤツリグサ)
 スズカケノキ
 スベリヒユ
 スミレ
 セキチク (ナデシコ)
 セリ (サンケイ、
 カラカサバナ)
 センダン
 センリヨウ (チャラン)
 ソテツ
 ソヨゴ (モチノキ)
 ダイゲキ (トウダイグサ)
 タカトウダイ
 (トウダイグサ)
 タコノキ
 タシロイモ
 タデ
 タヌキアヤメ
 タヌキモ
 ダンドク (カンナ)
 チャラン (センリヨウ)
 ツゲ
 ツチトリモチ
 ツツジ (シヤクナゲ)
 ツツラフジ
 ツノゴマ
 ツバキ (サザンカ)
 ツユクサ
 ツリフネソウ
 (ホウセンカ)
 ツルウメモドキ
 (ニシキギ)
 ツルナ (ザクロソウ)
 ツルムラサキ
 デンジソウ
 テンナンシヨウ
 (サトイモ)
 テンニンカ (フトモモ)
 トウエンソウ

トウシンソウ (イグサ)
 トウダイグサ (タカト
 ウダイ、ダイゲキ)
 トウツルモドキ
 トキワギヨリユウ
 (モクマオウ)
 ドクウツギ
 トクサ
 ドクダミ (ハンゲシヨウ)
 トケイソウ
 イチカガミ
 トチユウ
 トチノキ
 トペラ
 ナス
 ナタネ (アブラナ)
 ナデシコ (セキチク)
 ナンヨウスギ
 ニガナ
 ニクズク
 ニシキギ (マユミ、
 ツルウメモドキ)
 ニレ
 ノウゼンカズラ
 ノウゼンハレン
 ノボタン
 バイナツブル
 (アナナス)
 ハイドクソウ=
 ハエドクソウ
 ハイノキ
 バシヨウ
 ハスノハギリ
 ハゼノキ (ウルシ)
 ハゼリソウ
 ハナイ
 ハナシノブ
 パナマソウ
 ハナヤスリ
 パパイヤ
 ハマウツボ
 ハマザクロ (マヤブシキ)
 ハマサシ (イソマツ)
 ハマジンチヨウ
 ハマスゲ (カヤツリグサ)
 ハマビシ
 バラ (ノイバラ)
 ハンゲシヨウ (ドクダミ)
 ハンノキ (カバノキ)
 パンヤ

バンレイシ
 ヒイラギ (モクセイ)
 ヒカゲノカズラ
 ヒガンバナ (スイセン)
 ヒツジグサ (スイレン)
 ヒナノシヤクシヨウ
 ヒノキ
 ヒメハギ
 ビヤクダン
 ビヤクブ
 ヒユ
 ヒルガオ
 ヒルギ
 ヒルムシロ
 フウチヨウソウ
 フウロソウ
 (ゲンノシヨウコ)
 フウチヨウソウ
 フクロユキノシタ
 フジウツギ (マチン)
 フタバガキ
 ブドウ
 フトモモ (テンニンカ)
 フナ (カクト、クリ)
 ヘイシソウ (サラセニア)
 ヘゴ
 ヘビノボラズ (メギ)
 ベニノキ
 ベンケイソウ
 ヘンルウダ (ミカン)
 ホウセンカ
 (ツリフネソウ)
 ホシクサ
 ホモノ (イネ)
 ホルトノキ
 ボロボロノキ
 ホロムイソウ (シバナ)
 ホンゴウソウ
 マオウ
 マキ
 マタタビ (サルナシ)
 マチン (フジウツギ)
 マツ
 マツモ
 マツカゼソウ (ミカン)
 マツバラ
 マツムシソウ
 マメ

マユミ (ニシキギ)
 マヤブシキ (ハマザクロ)
 マンサク
 ミカン (マツカゼソウ、
 ヘンルウダ)
 ミクリ
 ミズアオイ
 ミズキ
 ミズニラ
 ミズハコベ (アワゴケ)
 ミズワラビ
 ミソハギ
 ミゾハコベ
 ミツバウツギ
 ミヨウガ (シヨウガ)
 ムクロシ
 ムラサキ
 メギ (ヘビノボラズ)
 モウセンゴケ
 (イシモチソウ)
 モクセイ (ヒイラギ)
 モクセイソウ
 モクマオウ
 (トキワギヨリユウ)
 モクレン
 モチノキ (ソヨゴ)
 ヤシ (シユロ)
 ヤツコソウ (ラフレシヤ)
 ヤドリギ
 ヤナギ
 ヤブコウジ
 (ヤマダチバナ)
 ヤマグルマ
 ヤマゴボウ
 ヤマタチバナ
 (ヤブコウジ)
 ヤマトグサ
 ヤマノイモ
 ヤマモガシ
 ヤマモモ
 ユキノシタ
 ユリ
 ラフレシヤ (ヤツコソウ)
 ラン
 リユウビンタイ
 リヨウブ
 リンドウ
 レースソウ
 レンブクソウ
 ロウバイ
 ワサビ